



数据加载失败，请稍后重试！

八十翁井上香彥先生經驗
醫專醫學士野津猛男編述

增訂六版

臨 牀
漢 法
醫 典

大正醫報社發行

發行所

京都市間之町二條上ル
 攝替穴阪一九五九〇番

大正醫報社

不許複製

臨漢
 床法
 醫典

印刷者

須磨勘兵衛

京都市北小路通新町西入

發行者

池田松五郎

京都市間之町通二條上ル

著者

野津猛男

大正十四年十二月二十五日 第六版發行
 大正十四年十二月二十五日 第五版發行
 大正十四年十二月二十五日 第四版發行
 大正十四年十二月二十五日 第三版發行
 大正十四年十二月二十五日 第二版發行
 大正十四年十二月二十五日 第一版發行

正價金壹圓八拾錢



井上香彦翁小照
及其墨蹟

述懷

吹風悲涼之氣
洗心修己之志
此翁之志也
井上香彦翁

第四版發行に就きて

一昨年本書第三版を發行するや數月ならずして一本を
剩さず頒布し盡せり、故を以て發行社は當時直に第四版
を發行せんことを迫りて已まざりしも余は兼て本書の
改版毎に増補改訂を加へて、漸くに本書の完成を期する
の希圖を懷けるを以て、當時發行社に對し第四版發行は
本書の増補改訂後に於てせんことを求めたり、然るに余
は其後病褥に親しむの身となり、又た筆硯に従ふを得ず、
本書増訂の志今に於て果す能はず、誠に遺憾と爲す、かく
て本書絶版後一年有半頻々たる購讀者の要求は日を經

るに従て益々多きを加へ、今や増訂未だ成らざるの故を以て購讀者の望を空しくするに忍びずと爲し發行社は江湖の急需を充す爲第四版發行を求めて止まず、余も亦重病の後健康猶舊に復せず、未だ俄かに筆を執るの日に期すべからざるを以て、即ち暫く増訂の素懷を抛ち、急に第四版を發行するに至れり、讀者幸に諒焉。

大正七年三月

東京淺草の僑居に於て

著者 識

臨漢法醫典の再版に就て

余が本書第一版を公けにせんとするに當り、一知友余に言て曰く獨逸醫學全盛の今日に於て和漢醫法の應用を説くは、竿を好む齊王の門に立て瑟を鼓するの愚に類せずやと、當時余もまた胸中聊か世上多數の顧みる所とならざるへきかを危ぶめり、然かも本書一たび出づるや僅々月余にして其第一版を賣盡し又た一本を剩さざるの盛況を見るもの眞に望外の幸と云ふべし、之れ實に著者たる余の光榮とする處にして、又た實に今日醫學界の趨勢を卜すべきにあらずや、但だ余の淺學不才にして經驗

に乏しく、漢法醫術の眞諦に於て未だ之を盡さざるが爲め余の述作が讀者をして隔靴搔痒の感を免がれしむる能はざるを遺憾とするのみ。殊に本書第一版の編著は匆卒の間に執筆し十分の推敲を費やすの迫なく且つ校正の杜選に由りて製本の後誤謬缺漏を發見せる點少なからず、故に第二版に於ては其缺漏を補ひ誤謬を訂し勉めて之れが完備を計らんを期せり、然かも一版賣切れの後購讀者の要求迫急なるを理由として發行社は多少の増補を以て急に第二版を上梓せんことを求めて止まず、即ち第一版の誤謬を訂したる外、本文に於て十餘項の

病症及び外用膏藥處方等三十餘例を追加し附録に於て
和漢藥品の主効諸病主藥、藥例等を追加し爰に梓に上す
ことゝせり、匆忙の執筆、猶不備の多きを免れずと雖も第
一版に比し稍々備はれるものあるを疑はず、其の大成に
至りては他日重版の日を期せん、讀者幸に諒焉

本書の編述に關し、鴨灣井上翁の懇篤なる指導の外、多數
の先輩知友より重要な注意啓發を受けたるを謝し、殊
に大正醫報主筆嘯風池田君の協力に俟つもの多大なり
しを特記し感謝の意を表す

大正四年十月

野津猛男謹識

緒言

余が和漢醫法研究の創意

一著者曾て門司に在りて開業せる時、英國軍醫官オレフ
アント氏同地に在りて胃患に罹り、屢々嘔吐して飲食
を絶つこと久し、當時船醫たりし氏の令弟は米醫ニウ
マン氏と力を協せて之が治療に當り、百方其術を盡す
も嘔吐更に鎮まらず衰弱日々に甚し、關門在留の宣敎
師某痛く之を憂ひ、余に一診せんことを乞ふ、蓋し氏の
再起せざるべきを思ひ、帝國の醫師たる余の死亡診斷

書を認めしめん爲なりし也、余即ち往て之を診す、ニウ
マン氏等具さに症状及治療の經過を語り、余に問ふに
良案なきやを以てせらる、然かも余が試みんとする普
通鎮嘔の療法は兩氏に由りて既に十分に試みられた
る後なれば殆んど余が手を下すべき餘地無し、然かも
此一刹那余が胸底圖らずも一考案の浮ぶものあり、即
ち漢法藥の應用を試みんと、念是なり、茲に於て兩氏
に應へて曰く余に一策あり之を試みんと、辭去家に歸
り漢法醫書を取調べ小半夏加茯苓湯を作り之を瓶に盛
りて與へ服用せしむ、一二服にして奇効忽ち顯れ嘔吐

殆んど已む、爾後加療數日にして健康舊に服し、異郷の鬼たるを免れたるを以て厚く余に謝意を表せられたることありき、今日に於て半夏浸劑を鎮嘔劑に用ゆるが如きは醫科大學を初め各病院、醫家に於て普通常有の事實と爲り何等珍とすべき無きも、當時余が究餘の一策として小半夏加茯苓を應用したるは實は偶然の着想に出で斷じて大學其他の鑿に倣ひたるに非ず、然して此の偶然の着想が意外の成功を博してより余は深く漢方醫術未だ全く廢つべからずとの事を肝に銘するに至れり、余が漢法研究の一念は實に此時に萌し

たる也。

漢醫方に對する今昔の感想

一顧みて思へば余少壯高等學校醫學部を卒業するや、血氣横溢、當時自ら思へらく泰西醫術の一般稍々窺ひ得たり、以て臨床に應用し患者救治の任を全ふし得べしと、然して漢法醫術の如きは粗漫なる解剖學、無稽妄誕に滿てる生理病理論、浮誇なる藥物說の上に立てる砂上の樓閣にして終に倒壊敗滅の運命を有する前代の遺物に過ぎずと思惟せりき、故に當時適ま郷里に歸省し父祖幾代漢方醫なりし余が家に漢法醫書が雜然群

然として庫中に堆積せられたるを見ては却て之を不快とし、二束三文に賣飛ばさんか、解て油團を造らんかと思惟せる事屢々なりき、而して余が郷黨の知人往々治を漢方醫に乞ふ者あるを見ては寧ろ之を憫然なる滑稽事なるかに思ひたる程なり、然かも爾後十餘年、余は醫科大學、傳染病研究所、胃腸病院等に入りて少しく研究の歩武を進め、或は自から開業して幾多臨床の經驗を重ぬるに従ひ、泰西醫術も悉く倚信するに足らず、漢方醫術も悉く排斥すべきに非ざることゝ了解するに至れり、而して曩に二束三文に賣飛ばさんと思惟せ

る故紙堆中より小半夏加茯苓の處方を搜り出して怪
我の功名を博したるは何たる奇異の因縁ぞ、然かも曩
に治を漢方醫に請ふを惘然なる滑稽事と思惟せる余
が、老漢法醫に深き欽仰の念を拂ひ其の教を乞ふて漢
法醫道の一斑を覗ひ、敢て本書を刊行して現代と後人
とに漢醫方を應用せんことを慫慂するに至れる余自
身の變化に至りては殆んど夢の如き感あり。

進歩せる日新醫學と漢醫方の應用

一今日に於ける醫學の進歩は眞に驚嘆に價するものあ
り、其の幽を聞き微を極め殆んど盡さざる處なし、殊に

解剖生理、病理、醫化、藥物等の精緻なる研究は細菌、微生物學の長足なる進歩と相俟て正確なる醫學の基礎を築き、ラヂウム、X光線、幾多の血清療法、化學療法等相繼で發見せられ、外科手術の著しき發達と相應じて臨床治療上に異常なる進歩を來せり、此の發達せる西洋醫學の前には漢法醫術は全く其の光彩を失ひ、到底之と相對抗し得べきものに非ざるは固より言を俟たず、從て醫學研鑽者は西洋醫學を正宗として之が研鑽を主とすべきは論なきも、西洋醫術の今日のごとき發達を以てしても之を治病の實際に視る時は未だ必ずしも

遺憾の點なしと云ふべからず、試に見よ今日の醫學は
一の麻疹さへ豫防し能はざるに非ずや、其の内科、小兒
科等の臨床に於て多くの場合服藥の効驗に俟つある
のみなるは漢方醫術と相距る果して若干ぞ、然して其
應用せらるゝ藥物の種類範圍も殆んど一定の範疇を
出でず、其の治療の成績統計が必ずしも満足すべから
ざるものありとせば、實際治療上に於ける日新醫學の
權威も亦た知るべきのみ、若し此間に於て泰西醫術以
外治療上實際の治驗を示すものあらば採て以て之を
應用するは民生救治の仁術を執る醫家當然の責務と